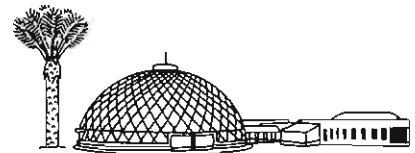


かんちけん倶楽部

TOTTORI KANCHIKENCLUB



2006年度乾燥地研究センターの活動報告

「砂漠と砂漠化に関する国際年」記念イベント (平成18年8月25日～28日)

2006年は、国連が定めた「砂漠と砂漠化に関する国際年」であることを記念して、国連砂漠化対処条約事務局、国際連合大学、環境省、鳥取県などと主催して、8月25日に国連大学、8月27日、28日に鳥取県民文化会館で記念イベントを開催しました。

東京イベント（国際シンポジウム「砂漠とともに生きるⅡ－乾燥地科学と現場での取り組み」）では、マハムード・モハメド・バシール・エルソル国際乾燥地農業研究センター（シリア）所長、ハンス・ファン・ヒンケル国際連合大学学長等の基調講演とパネル討議を、鳥取イベント（乾燥地科学と砂漠化対処に関する国際会議）では、27日にシンポジウム（国際貢献に向けた市民の役割）、28日に研究集会を行い、恒川篤史乾燥地研究センター長、幸田シャーマン国連広報センター所長等の講演、パネル討議、研究発表、ポスターセッション、ディスカッション、企業による環境技術の展示などが行われ、東京、鳥取とも多数の参加者で賑わいました。

本イベントでは、乾燥地分野における国際的な研究交流や活動の交流を深めること及びこれまでの研究・実践の成果をレビューし今後の方向性を考えることを目的として、乾燥地分野で活躍されている国内外の専門家による討議や、乾燥地研究センターを中心に実施している21世紀COEプログラム「乾燥地科学プログラム」等の研究成果と今後の課題が報告されました。本イベントを通じて、日本の乾燥地研究分野における鳥取大学乾燥地研究センターのプレゼンスを内外に示すことができました。



「とっとり乾地研倶楽部」は、世界の乾燥地農業、砂漠化防止に貢献する鳥取大学乾燥地研究センターの活動を支援しています。

上野の山発 旬の情報発信シリーズ（第12回） 乾いた大地・砂漠－人と自然 －水がほしい！ 緑がほしい！－



平成19年3月2日から11日までの10日間、国立科学博物館にて上野の山発 旬の情報発信シリーズ（第12回）「乾いた大地 砂漠－人と自然」展を開催しました。

「砂漠を科学し、砂漠化を考えよう！」をメインテーマとして、乾燥地研究センターを中心に、これまで鳥取大学で蓄積されてきた乾燥地研究の成果、そして21世紀COEプログラム「乾燥地科学プログラム」の研究成果を一般の方々にもわかっていただけるように、できる限りやさしく解説しました。

会場では、乾燥地の人と自然について、その成り立ちや不思議を、パネルや映像、ジオラマ模型などで解説しました。また、砂漠クイズにチャレンジするコーナーや、風紋観察、鳴き砂などを体験するコーナーも設けました。塩害実験では子供たちが砂に塩が集積する過程に興味深く観察していました。一番人気は、砂絵作りのコーナーで、親子で砂絵を楽しまれる方で終日大盛況でした。期間中に9千人を超える多くの方々にご来場していただき、楽しみながらも乾燥地の人と自然、また砂漠化の問題について考えていただく機会とすることができました。



～大学院生を海外へ派遣、調査研究活動を行っています～ 平成18年度15名

＜鳥取大学大学院連合農学研究科 西野俊一郎＞

植物生産分野に修士課程から在籍し、現在は博士課程2年目になりました。私の研究は、実際に現地に行き「乾燥地の農村で、需要と供給のバランスが成り立っているかどうか？農業の生産力はどのくらいなのか？」を、モデルを使って評価する研究をしています。



今、調査している農村は、中国の陝西省延安市安塞県、ちょうど黄土高原の真ん中あたりにあります。黄土高原では斜面での耕作が土壌侵食の原因として問題視されていましたが、最近中国で実施されている退耕還林（斜面の耕作を止めて植林をする）などの環境保全政策により、緑化された森林と草地が増え、斜面農地は侵食を抑え易いとされる段々畑に変わってきました。畑が山の足元から天辺まで



広がる様子は、まさに天まで耕すようです。この土地で、私は農家を訪問しアンケート調査を行ったり、土地利用、土壌侵食、畑の生産力の調査のために周辺の山々と畑を歩きまわったりしています。

現在の研究に取り組むようになってからは、海外調査に何回も行くようになりました。そこでは、日本とは違う言語や食事に出会う楽しみがあり、何より日本での研究ではわからなかった現場を知ることができました。今の貴重な経験を基に、将来は乾燥地の環境保全対策に貢献できる仕事に取り組みたいと思っています。

乾地研のひと

〈教授 篠田 雅人〉

乾地研倶楽部の皆さまには昨年7月の講演会で新任のご挨拶を申し上げ、現在私が研究していますモンゴルについて講演する機会をいただきましたが、あらためてご紹介申し上げたく筆をとりました。私は昨年4月に首都大学東京から神近先生の後任として乾地研に赴任しました。それから1年が経とうとしていますが、季節が巡ってこちらの研究・生活のリズムに慣れてきたところです。私は大学院生のころから何十年來(?)、乾燥地の気候形成・気候変動の研究をして参りました。ここに赴任することはその研究を発展させる上で大きな意義を持っていますので、このような場所に身をおくことの幸運をかみしめている次第です。さらに、乾燥地研究に対してご理解とご支援のある倶楽部ならびに県民の皆さんがいらっしゃることは、かえがたい励みになっております。



私の経歴を少しお話しますと、大学院生のときにアフリカのケニア国立ナイロビ大学へ留学し、サハラ砂漠南縁のサヘルの干ばつ研究を始めました。その後、研究対象地域は中央アジア、モンゴルへと東へ移ってきましたが、一貫して乾燥地の研究をしてきました。私の研究はもともと基礎科学的な側面が大きいのですが、最近では実社会への応用についても取り組み、モンゴル国のJICAの技術協力プロジェクトのなかで、「干ばつ・ゾドの早期警戒システムの構築」を行っております。モンゴルは遊牧の国ですが、乾燥地であるとともに寒冷地（とくに冬季）であるため、寒雪害によって多数の家畜が餓死することがあります。この寒雪害のことをモンゴル語で「ゾド」といいます。私の一連の研究は、『砂漠と気候』成山道書店という本にまとめてありますので興味のある方はご覧ください。

乾地研での私の役割は、これまであまり取り組まれてこなかった乾燥地由来の地球環境問題（気候変動、黄砂）を研究することで、これは乾地研の研究の幅を広げることにつながります。ここでは、新しい研究プロジェクトをリーダーとして先導する役割があります。同時に、個人的には優れた研究環境に包まれ、自分の研究を飛躍的に発展させるよい機会でもあります。乾地研倶楽部の皆さまには、これまでどおり温かい目で見守ってくださるようお願い申し上げます。

〈助教授 坪 充〉

昨年の4月に鳥取にやってきました。以前は、アメリカ合衆国、南アフリカ共和国、オーストラリアと海外で10余年暮らしていました。乾地研の植物生産分野に所属し、植物生産および農業気象、特に作物モデリングを中心に研究しています。作物モデリングとは、日射量、降水量、気温、風速などの気象データから作物の生育・収量の推定をおこなうテクニックです。



アメリカ時代は穀倉地帯が広がるアイオワ州の大学院修士課程で作物生産・生理を学びました。その後、南アフリカの半乾燥地、フリーステイトにある大学で農業気象学において博士の学位を取得し、ポスドクとして従事し、約6年間過ごしました。オーストラリア時代は、クィーンズランド州の大学で東南アジア天水田の水収支の研究をしていました。現在は、乾地研の拠点大学プログラム「中国内陸部の砂漠化防止及び開発利用に関する研究」、そして私の研究の源である「南部アフリカの干ばつと食糧安全保障に関する研究」に励んでいます。

○乾燥地研究センター一般公開

乾燥地研究センターでは、センターの研究活動を広く一般のみなさまに知っていただくため、一般公開を実施します。当日は、講演会、大好評のメロン販売、砂漠クイズ、研究室紹介などを行います。

第1回公開 平成19年 8月4日(土) 16時から21時 開催予定

第2回公開 平成19年10月6日(土) 10時から16時 開催予定

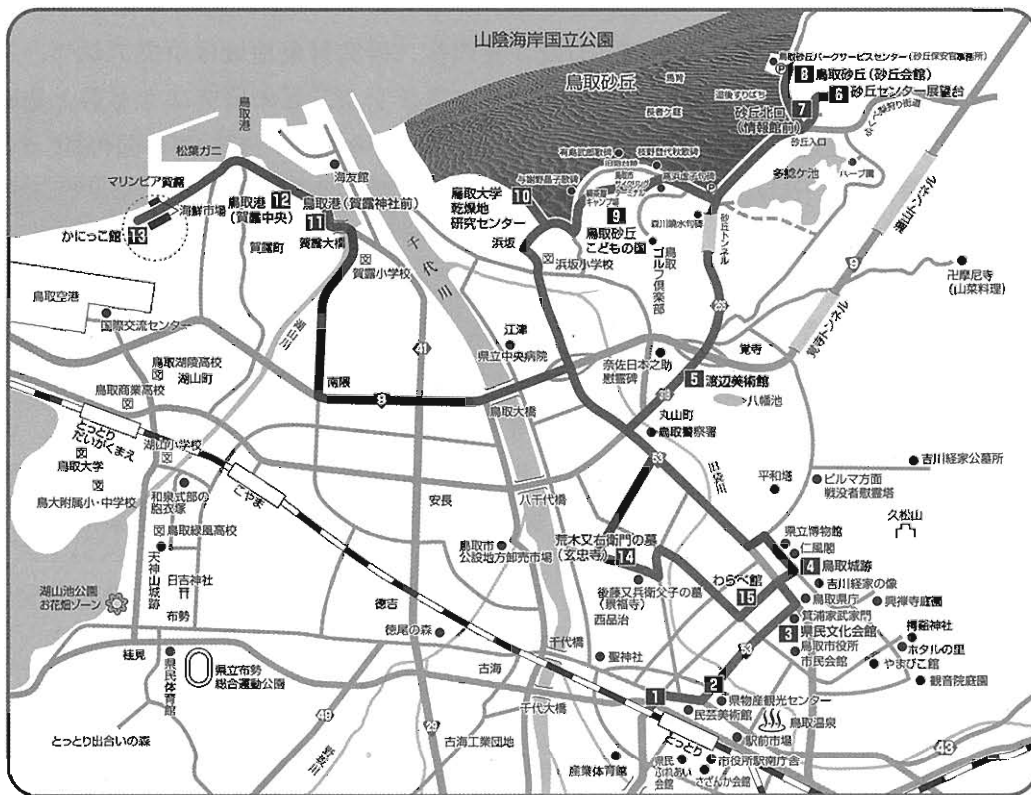
○乾燥地学術標本展示室等の休日公開

乾燥地研究センターでは、土・日・祝日に「ミニ砂漠博物館」を公開しています。センターまでは、ループ麒麟獅子号をご利用ください。

乾燥地研究センターへのアクセス

【ループ麒麟獅子号】土・日・祝日・夏休み(7月20日～8月31日は毎日)運行

A・Bコース 各6便 運行時間は、鳥取市観光協会ホームページ「ループ麒麟獅子バス」を参照してください。<http://www.tottori.to/loopbus/>



【とっとり乾地研倶楽部の設立趣旨】

砂漠化防止や乾燥地農業について世界的に貢献している鳥取大学乾燥地研究センターは、世界の乾燥地研究ネットワークの中核として学術研究、人材育成に大きな役割を果たしており、地域にとっても世界に誇るべき知的財産です。

そこで、鳥取大学乾燥地研究センターの活動を地域で支え、その研究活動と研究成果を広く情報発信することを通じてこの地域の発展を図るために「とっとり乾地研倶楽部」を設立しました。